

大陸（南支）

ありし日の断章

中南支に戦つて

北海道 田中正己

「地大物博」の中国大陸を北から南へそして中部へとわたり歩いた行程の中で、北は満州国中堅官吏としてのそれを除いては、軍陣生活のすべてにつきる。

リラの花開き木蓮の香りもゆたかに、荔枝の出盛るころの珠江は今日も悠々と流れていようし、青膽河は満船の貨客を三埠へと運んでもいよう。星はうつり人は変わり国また変わったにせよ、

大揚子江（長江）の架橋や核をも開発した「人民中国」へのうつろいの中にも、大自然のみは中国の母なる大地のなかで、やはり昔のおもかげをひそめておるのではあるまいか。「永遠なるもの」への慕情をこめて若干の回想を述べよう。

営舎の論理

「兵営は死生を同じくする軍人の家庭である」。初年兵以来叩きこまれた一節である。「共苦同甘」非常のときに備え、日常の生活実践はきびしくとも、納得のゆく練成の中に生かさなければならぬであろう。「要領のよさ」や、まず班内できたえる「上級者独善」の軍人の家庭づくりが、何故実際には意地悪いものと映ってしまうのである

うか。

顔もゆがみ、歩くのもやつの態でもあった幹
部候補生受験の前夜の試練、いわれなきビンタの
横行、嘲笑や憎悪、偏見と屈辱にも耐えさすこと
が、はじめて「軍人精神」の髄を体得させ得る
ものか疑問である。「大命」絶対の閉鎖的社会
なるが故に、強兵育成のためには、人間の尊重を
棚上げしてもやむなしという非情の論理は、果し
て伝統主義の上に安易に認められてよいものであ
ろうか、単に懐かしさのみではすこせないであろ
う。「戦地教育」を受けて来た杭州西湖畔での初
年兵時代の朝を回想する。

率先垂範

軍隊生活を通じ影響を受けた教官に、浙江省紹
興幹候隊での年若き久米中尉の強い実践力とさわ
やかさを想い出す。紹興は「紹興酒」ゆかりの地
であるが初年兵には無縁であった。警備と教育を
かねた配置のように思われ演習にも熱がこもって

いた。しかし、われわれが仙台教導学校に到着し
て幾日もたたないうちに、久米中尉は連隊旗手と
して紹興付近の戦場で戦死されたという。

実弾の飛ぶ中で、陣地確保の区署法を手づから
教えてくれた夜間演習の一夜を思う。私は今研究
と教育に従事する片隅から、理論と実践とのむず
かしさに悩むものの一人である。

演習のセレモニー

見習士官であった頃、本土の師団対抗の秋季機
動演習に参加したことがある。私は小隊の主力と
共に軽機関銃を路上に据えて、敵進出に万全の構
えをしていた折も折、猛射を受けたものは肅然と
やって来る「軍旗」を囲む装備に乏しい独立の一
群であった。

審判官は一小部隊では「軍旗」には勝てない、
負けだからさがれと判定した。次いで払暁戦で何
程の差もない制高点が常に必ず有利のごとく判
定した。審判の形式的判定は実弾下では通じな

い、擬制弾下の論理がみられる。波部隊（南支派遣軍）への転属決定はその直後のことである。

管理ピアノの進物

広東で芳村分遣隊長のころ任務の一つは敵産の管理にあった。外人の別荘地帯でもあった芳村の管理家屋は荒廃し、管理台帳すらなかった。仕事の第一歩は一軒ずつの台帳づくりから始めた。

徳士古石油倉庫や亜細亜石油倉庫の在庫数、留守番の残った外人住宅以外の財産はピアノ一台だけであった。その他華僑の力によるという培英中学とか真光高級中学校では、殆ど一室ごとにピアノがあった。

ある日ピアノ一台の盗難事件がおこった。芳村の碼頭からサンパンで運ばれたもので、所もあらうに憲兵隊司令部への進物に化けたことが判った。型がモリソンだという主張と、河南へ運んだサンパン（中国の小舟）から足がついたものである。

花市の芳村

芳村分遣のころ毎週の機動宣撫を信条とした。

南端の南激村だけは常に逃亡してなじまない灰色部落だった。上芳村の花市はさわやかであり印象的だった。茎からはずした花卉部だけを彩りも鮮やかにならべ立て、髪飾りに用いた姑娘の姿が、サンパンによる蛋民たんみんの櫓の音と共によみがえってくる。わが警備地区への愛着であろう。

冬は硬い落葉を針金でつきさし拾いあつめ、盗み出されたピアノが田圃に投げ出されて上部の蓋の部分かむしり取られた姿をみたときは、薪炭に苦しむ生活苦の表れとしても、腹立たしい若き日の一コマであった。

広東市内警備のあの日あのころ

芳村分遣隊長より本部付になった理由は判らないが、広東市内警備隊として、連日の爆弾事件の度毎に木村兵長運転のサイドカーで出勤するのが、むしろ日課であった。爆発物は主として敵し

い検問にもかかわらず、二重底のかごにかくされた煙草ジャーニーの缶に装置されたものが多かったようであった。

若杉参謀（三笠宮）を沙面租界に警備したのは第三中隊だったし、大隊の責任警備地点まで無事であれば足るとする責任観、ノースアメリカン機の市内墜落（五月八日）は痛快なものであったにしろ、飛来する敵機に対して、わが弾幕が常に低く、天河飛行場を飛び立つ彼我の空中戦は殆ど実現できなかった。省境外ではいつも撃墜したと当時の新聞は報じていた。

苦心の効果

江門新会地区警備の間、ト号演習（湘桂作戦準備）の極秘の情報収集は、短期間かつ特別の補助もない大隊に課された重大任務だった。

新会県の鈴木連絡官（特務機関）と昭和通商江門駐在員の特別の配慮で全行程七百余キロ（南支那西端）にわたる遠隔情報も、どうやら目的を達

して兵団情報を圧倒し、大隊調査意見の通り前進経路は決定されたと信じている。

梧州警備隊の夢（任務は残置兵団）破れ、息つく間もなく蒙江地区への行動には納得できないものがある。ト号演習開始と共に、部隊輜重隊長としての苦難の追及は別として、「どうせ俺はゴロツキだ。こきつかわれてこづきまわされる」梧州へ至るト号演習前段の結果に対する井上部隊長の嘆きには共感できるもの一人ではあるまい。

情報の先制

ト号作戦の前段青膽河の啓開なるや、欧大慶軍の先遣隊を新昌埠に迎え、早大出という黄副官と今後の密絡を約して帰隊した。サンパンで帰る満月の夜の空はあくまで高く、青膽河は寂として櫓のきしむ音のみ。また広西省進駐の際、稜線上に点在する監視を確認しつつ、われは騎馬一〇を後方の凹地に待機させて、大壚と丸腰で会談した無謀さも思い出される。成功しないまでも情報活動

(情報担当将校) に対する先制の自負は若き日の
気負いでもあった。「任務本位に行動せよ」と。

決戦防禦と伝令

来賓県(広西省)における大隊規模の警備を一
個中隊で守備するためには、縦深ふかく長大な塹
壕構築は、かえって敵の逆用近接を容易にする。
県城警備はまずその対応にはじまる。

一方小哨にしても、掩体をもって舎屋を守る態
の陣地は余りに輕易にすぎた。六月に入る頃より
敵襲の頻度が増し、中隊本部への攻撃も激しさを
加えたある日「坐して死を待つ勿れ陣前攻撃の
み」と意見を述べてくれたのは中村曹長(機関銃
連絡下士官)であった。

その夜、機関銃を掩護とする擲弾筒迫撃砲を
もつてする曲射攻撃は敵の戦意をくじき敗走させ
たが、これより前小哨決死の連絡が小雨の中を、
ときには武江を泳ぎつつ夜陰にまぎれた遡上行動
は大胆そのものである。その決死の連絡兵は成島

伍長、石川兵長の二人であるが、弾薬等の補給を
うけて帰りゆく者に命じた言葉は「車站小哨の死
守」であった。

大溶江油路界の夜間戦闘で、成島伍長は惜しく
もその命を終わつたが、惜しみて余りある濃厚
な風貌がいまなお偲ばれる。

命運の岐れ路

羅漢山百朋街における激戦(米装備の蒋介石
軍)において、第一中隊が所命の目的を果たしつ
つ、犠牲を最小限にとどめ得た武運を忘れること
はできない。果敢な戦闘行動の蔭に泣くは戦場の
習い、それは主攻撃面に立たされるか否か。紙一
重の命運のわかれ路ともいえよう。

大隊が殿軍として柳州渡河点を撤去收容して敵
の追尾を阻みつつ一路北上する任務のために、こ
れほど撤退作戦の重みを感じたことはない。中隊
にとつては勿論、大隊戦力の一員として勇敢己を
空しくして、唯一途に任務にたおれた数多くのわ

かき命。或いは傷ついてもどり得なくなつた者等
かけがえのない各様のもち味を思うにつけ静かに
合掌を捧げるものである。

軍装回顧

青春はわが身に唯この一度だけである。もどる
ことのない青春の一コマを陣中に送り、もろもろ
の恩寵を得て生還し今日ある一人として、後進に
語り残すものがあるとするならば、「戦争を二度
繰り返してはならない」ということである。散華
していった幾多の戦友は、今も当時のままの軍装
で我らが胸によみがえる。まして遺族に対してい
うべき言葉もない。

生存した者もやがて自らにして消え去るであろ
うが「戦争なき平和」こそ人類の叡知により、人
間の尊厳性個人の尊重を基調とする「平和のうち
に生存する権利」の確立にまつほかないであろ
う。われらが人生を手段として取り扱い「再び政
府の行為により戦争の惨禍が起こることのないよ

うに」求めなければならぬ。世界の人民がそれ
ぞれ己が良心に忠実であるならば、はじめて真理
はわれわれを自由にするであらう。

【解 説】

広東市街、五月八日の空襲は、B 25（中型爆撃
機）、ノースアメリカン数機によるものであった。
米機の空襲は、我が軍の空軍基地、天河・白雲飛
行場というより、一般市民の密集する市街地、特
に市場に被害を及ぼした。解説者も、市内警備隊
の立場から、空襲後、市街地を視察、調査したの
であるが、市民の死亡、負傷者は多く、惨状は目
を覆うものであった。

しかし、我が軍の損害は比較的軽微であつたと
記憶するが、警備隊では、公用外出中の兵一人
が、繁華街道路において重傷を負つたとの報告は
あつた。撃墜されたB 25は、両翼より火を吹い
て、市場へ突入した故、多くの市民が爆死・焼死
したのである。

「ト号演習」とは、昭和十八（一九四三）年、発起した、湘桂作戦の秘匿名であつたと記憶する。広大な地区より発走する第二十三軍は、広西省へ進撃する経路の調査を極秘裡に行つていた。この作業（情報収集）は短期間に実施するものであつたが、筆者、田中氏（部隊情報主任）の心痛は大きかつた。

解説者は、当時、新政府（汪政府）第二十師団の連絡將校を兼務していた關係で、地元、軍閥、第二十師將校よりの情報は若干把握しており、また、部隊情報担当者、特務機関の鈴木連絡官との交誼あり、その間の状況は承知していた。

途方もなき大作戦で、中国大陆を縦断し、印度經由の大打通作戦らしいとの情報もあつた。しかし、本作戦は「一号作戦」と呼ばれ、占拠する鉄道名「湘桂（湖南省・広西省）」「粵漢（広東―衡陽―漢口）」「京漢（北京―漢口）」である。

これらの各線の要衝地域、特に在支米軍航空基地が含まれ、この航空基地の覆滅が目的であつた

（中国大陆より日本本土空襲対処）。

本大作戦は昭和十九年四月十八日、京漢作戦により開始、第十二軍はこれを打通。北・中支の戦線を結んだ。続いて湘桂作戦であるが「湘」とは、湖南省、「桂」とは広西省である。また、「粵」とは広東省である。所謂、中国大隊を北部から南部へ、さらに西部へと打通する。中国―仏印―馬來―ビルマ―印度という大構想であつた。

この大作戦を南支那から発起するのが、南支派遣軍である。二個師団、二個独立混成旅団をもつて発起し、中支より西方へは、第十一軍（所謂・中支軍）である。更には、北支軍より南、西下する師団もあつた。

その一翼を担う小兵力の、独立混成旅団の責務の重さは過大であつた。当面の敵は、蔣介石軍、第七戦区、第十二集団と第三十五集団があつた。その兵力は、約八個師団、二個旅、であつた。

この作戦は、南支派遣軍（第二十三軍）にとつては、初めての大作戦であつたので、当部隊に

とつての任務の重大さが、肩にかかつておるから、部隊幹部は相当の努力が必要であつた。

南支軍

湘桂作戦緒戦参加

神奈川県 星 澤 實

「一号作戦」とは「湘桂作戦」「粵漢作戦」「京漢作戦」及びその他関連作戦の総称である。この作戦名、湘桂（衡陽―桂林）、粵漢（広東―衡陽―漢口）、京漢（北京―漢口）は皆鉄道名である。これらの各線の要衝地域、特に在支米軍基地が含まれていた。

「一号作戦」は昭和十九（一九四四）年四月十八日～五月九日の京漢作戦により開始され、第十二軍は南部京漢鉄道を打通し、北・中支の戦線を結んだ。

続いてが湘桂作戦であるが、「湘」とは湖南省

であり、「桂」とは広西省、「粵」とは広東省のことである。従つて第十一軍（呂兵团）が「湘」から「桂」へ、第二十三軍（波兵团―南支派遣軍）は「粵」から「桂」へと行動し、柳州攻略はむしろ南支軍によると予定されていたのである。

そもそも、「一号作戦」実施については、昭和十九年一月「大陸命第九二一号」をもつて発令されたのである。第二十三軍に対して支那派遣軍は次の要旨の指示を与えた。

一、任務

昭和十九年六月頃第十一軍をもつて武漢地区から攻勢を開始する。第二十三軍は六月末頃一部をもつて北江に沿い作戦して第七戦区軍を牽制し、第十一軍の作戦を容易ならしめる。七月末頃、第二十三軍をもつて広東地区から作戦を開始し、第十一軍と呼応して敵を撃破し、桂林及び柳州附近を攻略したのち、遂川（広東北北東三七〇キロメートル 粁）及び南雄（広東北北東二四〇粁）附近の敵飛行場